

小学校高学年におけるゴール型の学習指導プログラムに関する検討 バスケットボールの授業を対象として

A study on the method of teaching in goal-type game
for the upper graders of elementary school: A case study of basketball classes

1K06B022

指導教員 主査 吉永 武史先生

石坂 美奈子

副査 関 一誠先生

2008（平成20）年3月に改訂された小学校学習指導要領では、ボール運動領域においてボールゲームの取り扱いが「種目」ベースから「型」ベースへと変更され、技能の内容としては、ボールを持たない動きが含まれた。ゲームパフォーマンスを向上させるためには「ボール操作の技術」（on-the-ball skill）と「ボールを持たない動き」（off-the-ball movement）の習得が必要とされ、習得した技術を、「いつ」「どのような場面で」発揮するかという「意思決定」も重要になる。この意思決定についての能力がなければ、どんなにゲームとは離れた状況下で技能を高めたとしても、実際のゲーム場面でその技能を発揮することはできない。このことを踏まえれば、ボール操作の技術やボールを持たない動きのみでなく、意思決定についても学習内容として設定し、その習得を保障する必要がある。

そこで本研究においては、ボールを持たない動きの1つであるサポート（スペースへ走りこんでパスを受ける動き）に着目し、どのような学習指導によって、どの程度学習可能かについての成果を得るために、小学校高学年のバスケットボール授業を対象にサポート学習を設定し、児童サポートならびに意思決定がどの程度身に付くのかについての分析を行った。

研究の手続きとして、最初に診断的授業評価を用いて被験者となる児童の実態把握を行った上で、7時間授業で構成したバスケットボール

の単元を展開し、形成的授業評価ならびにゲームパフォーマンス評価を用いて、児童の学習成果を確認した。そして、単元終了後には、総括的授業評価を用いて児童の体育授業に対する態度形成を確認した。その結果、以下の諸点が明らかになった。

単元前後に診断的・総括的授業評価を実施した結果、情意目標、認識目標、運動目標、社会的行動目標のいずれの観点も、単元後の得点が高くなっていた。

毎時間形成的授業評価を実施した結果、多少のばらつきがみられるが、単元進行に伴って右肩上がりに評価が高くなっていった。

ゲームにおける児童のサポートの動きを分析した結果、単元の1時間目が50.2%だったのに対し、単元の7時間目は64.1%であった。これは、タスクゲームとして設定した「パスパスゲーム」や「3対2アウトナンバーゲーム」によって、空いている場所を見つけて走り出す動きとノーマークの味方へパスを出すという状況判断を身につけることができ、実際のゲーム場面で発揮できるようになったと推察される。

ゲームにおける児童の適切な意思決定について分析した結果、単元途中、一時的な落ち込みがみられたが、単元前半の1時間目72.8%であったのに対し、単元後半の7時間目86.9%、約14%の伸びがみられた。単元前半は、サポート能力が高まっていないためにフリーな状態に

なっている受け手が少なく、パッサーの意思決定は難しいものであったが、単元進行に伴いサポートが定着してくると適切な意思決定ができるようになったと推察される。